

所属：スポーツ科学部 競技スポーツ学科

資格：准教授

氏名：今野 広紀

<p>研究課題名</p>	<p>ラジオ波焼灼療法を受けた肝臓がん患者の予後因子の検討</p>
<p>研究目的及び 研究概要</p>	<p>本研究では、ラジオ波焼灼療法を受けた肝臓がん患者の予後因子について、入院後時併存症の在院日数に対する影響を推定することを目的とする。肝臓がん治療におけるラジオ波焼灼療法は、早期のがんを適応とする低侵襲な治療法で、日本では1999年以降に急速に普及し、治療成績は良好である。しかし、特定の入院時依存症の存在によって、入院期間が長期化する症例が少なくない。肝臓がんは好発年齢が広く、患者数が増加傾向にある疾患であり、予後が良好であるとされるラジオ波焼灼療法適応の症例でも併存症の内容と有無によっては予後が左右される。そこで、患者の予後因子として、B型肝炎、C型肝炎、肝硬変症の3つのリスク因子が入院日数に与える影響について分析した。</p>
<p>研究実績の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の進捗状況 "Journal of Gastrointestinal and Liver Diseases"へ投稿中 ・得られた成果 B型肝炎、或いは肝硬変症を入院時併存症として持つ患者は、どちらも確率的に入院日数は長期化すること(40.8%, 24.5%)が確認された。また、入院の累積確率を求めた結果、 (1)B型肝炎群の患者は入院7日時点で20.0%、14日時点で50.0%の退院に留まるのに対して、非対象群は18.7%、68.1%が退院、 (2)肝硬変症群の患者は入院7日時点で12.7%、14日時点で56.8%の退院に留まるのに対して、非対象群は22.2%、73.6%が退院を期待できることがわかった。 日本の「診断群分類に基づく1日当たり定額報酬算定制度(DPC/PDPS)」では、入院後に発症する傷病として定義副傷病が規定され、制度設計上、考慮されている。こうした制度設計に鑑みれば、現在評価されていない入院時併存症を予後因子として評価に含めることは難しいことではなく、より病態に相応しい評価の仕組みを制度に盛り込む必要性を示唆する結果となった。 肝臓がんラジオ波焼灼療法そのものによる治療は相対的に短期で、かつ予後は良好であるが、B型肝炎と肝硬変症のような入院時併存症に対する制度上の評価は対象外である。B型肝炎と肝硬変症はどちらも肝臓がんの発症要因であることがリスクとして周知されていることから、この2つの併存症に伴う入院日数への影響について追加的な考慮をする必要があると考えられる。 ・今後の課題 B型肝炎と肝硬変症の入院日数への影響については一定程度の説明力がある一方で、C型肝炎については十分な説明力を示せなかった。その差異について、医学的にはC型肝炎の方がB型肝炎よりも重症化のリスクは高いと説明できるが、結果として肝臓がんを発症している患者についての説明力はなく、本研究の限界である。全国データを用いた検証が必要になる。 ・研究実績 なし